

線形回帰と最小二乗法

回帰と分類
線形回帰
最小二乗法

予測の問題：入力と出力

予測モデル

説明変数(explanatory variable)

入力：独立変数(independent variable)

予測変数(predictor)


$$y = f(x; \Theta)$$

目的変数(objective variable)

出力：従属変数(dependent variable)

応答変数(response variable)

回帰と分類

予測モデル

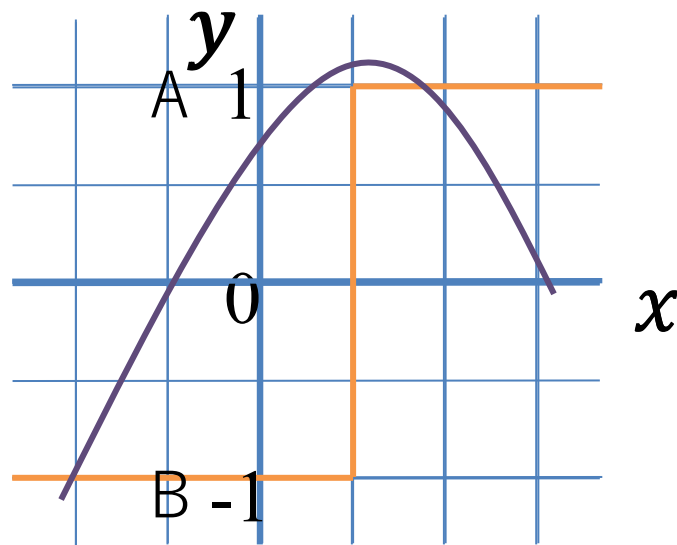
入力:

$$y = f(x; \Theta)$$

出力:

y が連続値のとき 回帰

y が離散値のとき 分類／識別



回帰／識別関数とパラメタ

予測モデル

入力:

回帰関数／識別関数
回帰モデル／識別モデル

$$y = f(x; \theta)$$

パラメタ

出力:

y が連続値のとき 回帰

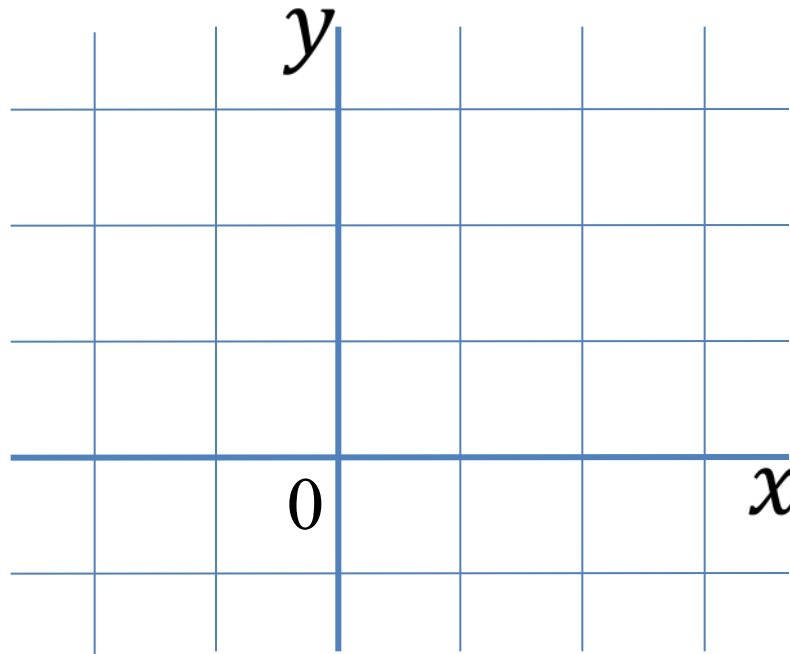
y が離散値のとき 分類／識別

x と y とを関係付ける関数の形は、
パラメタ θ で特徴づけられる。

回帰関数のパラメタ

$$y = f(x; \Theta)$$

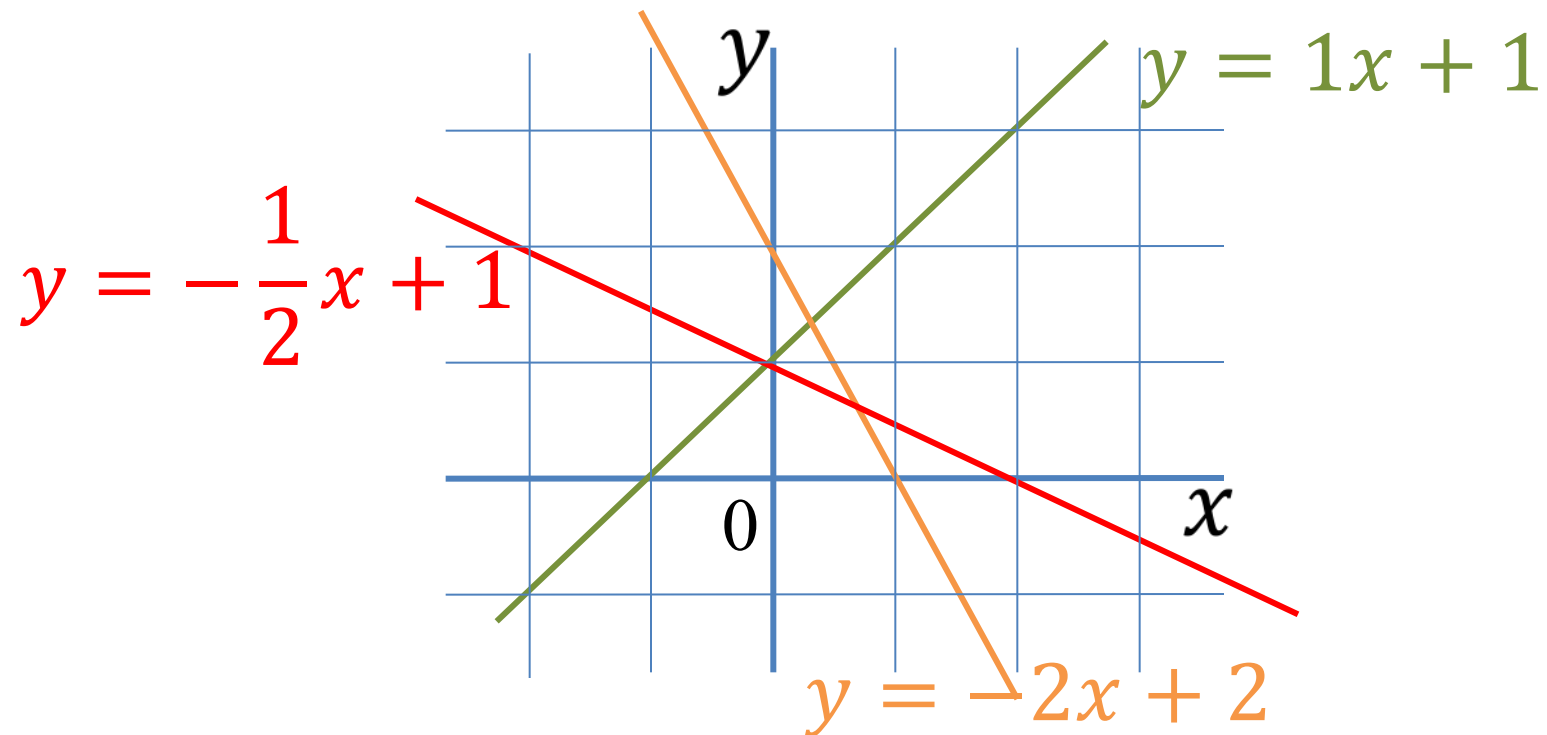
$$y = ax + b, \quad \Theta = (a, b)$$



回帰関数のパラメタ

$$y = f(x; \Theta)$$

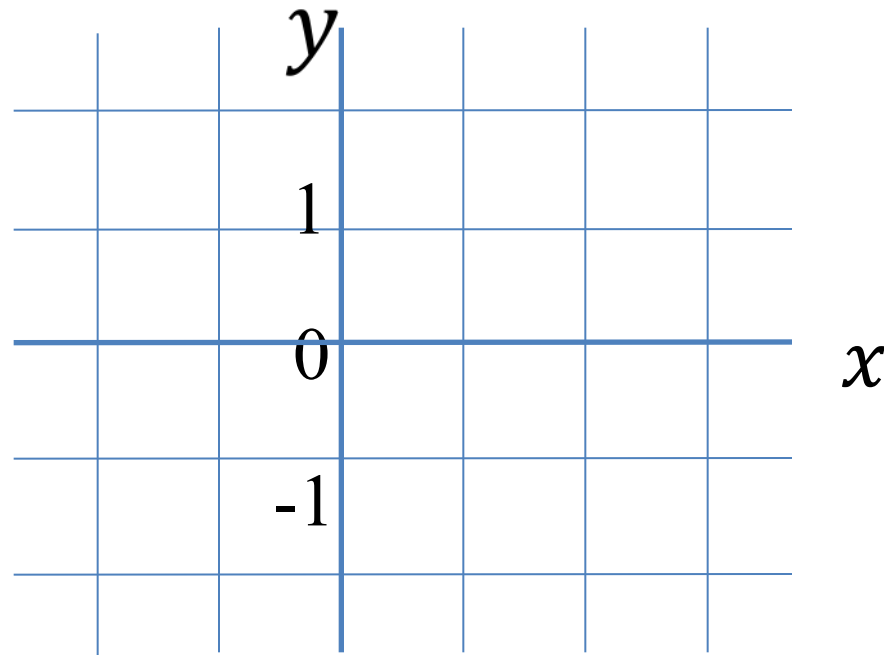
$$y = ax + b, \quad \Theta = (a, b)$$



識別関数のパラメタ

$$y = f(x; \Theta)$$

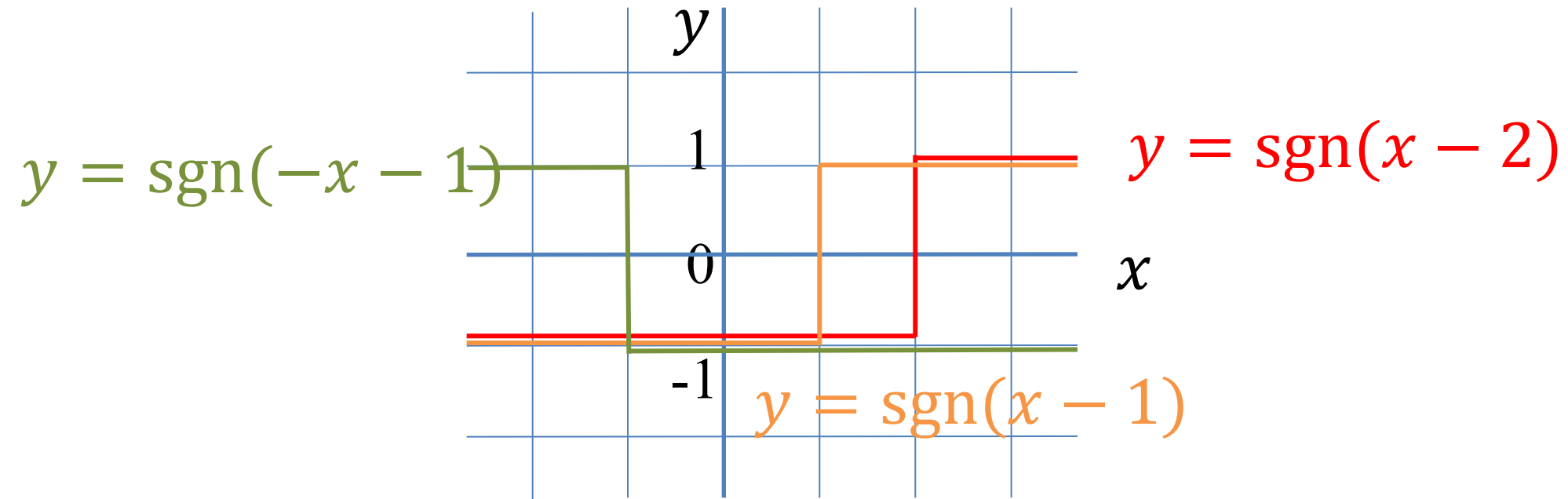
$$y = \text{sgn}(ax + b), \Theta = (a, b)$$



識別関数のパラメタ

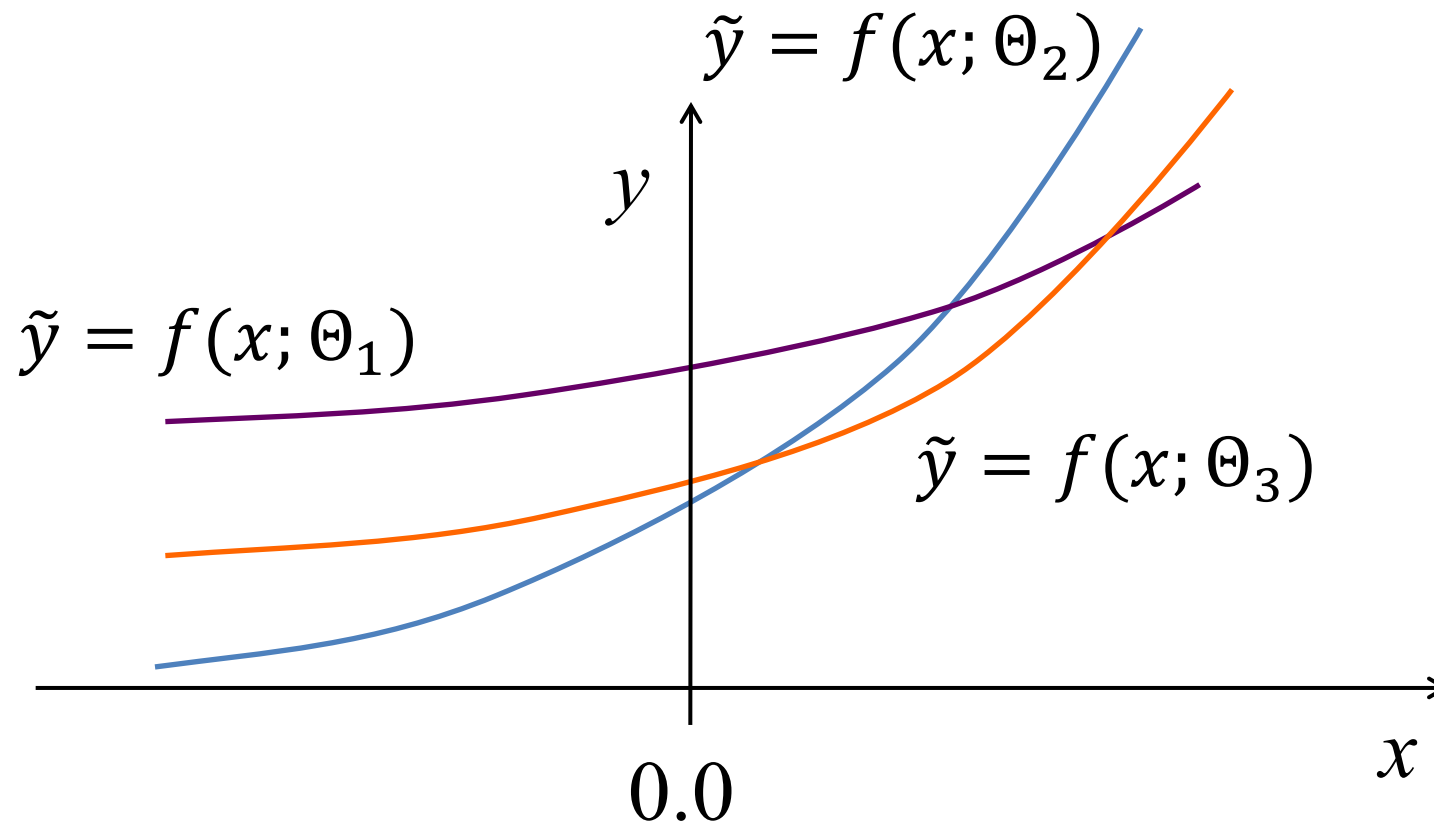
$$y = f(x; \Theta)$$

$$y = \text{sgn}(ax + b), \Theta = (a, b)$$



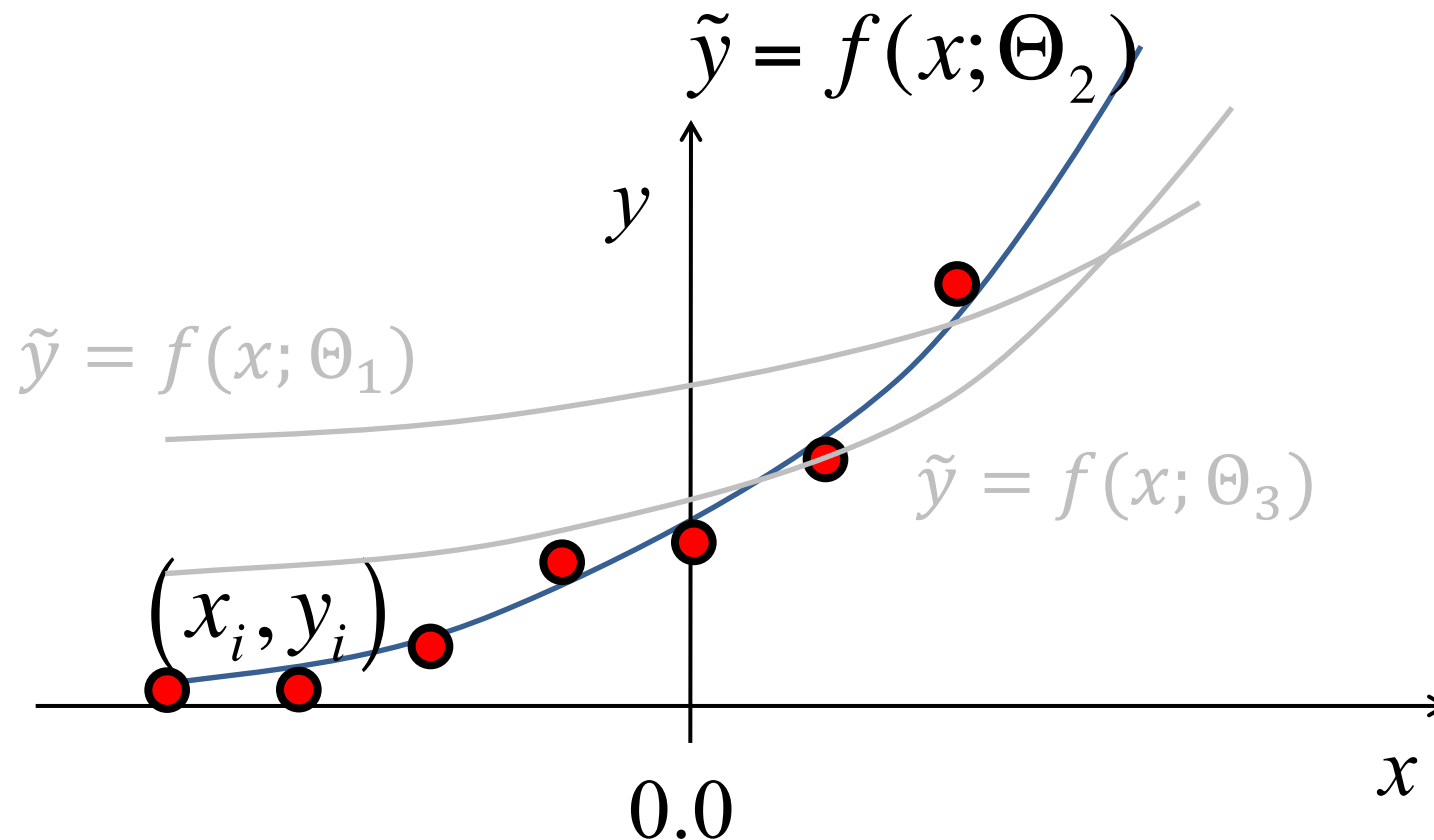
教師つき学習

パラメタ θ が異なると、様々な予測モデルができる。



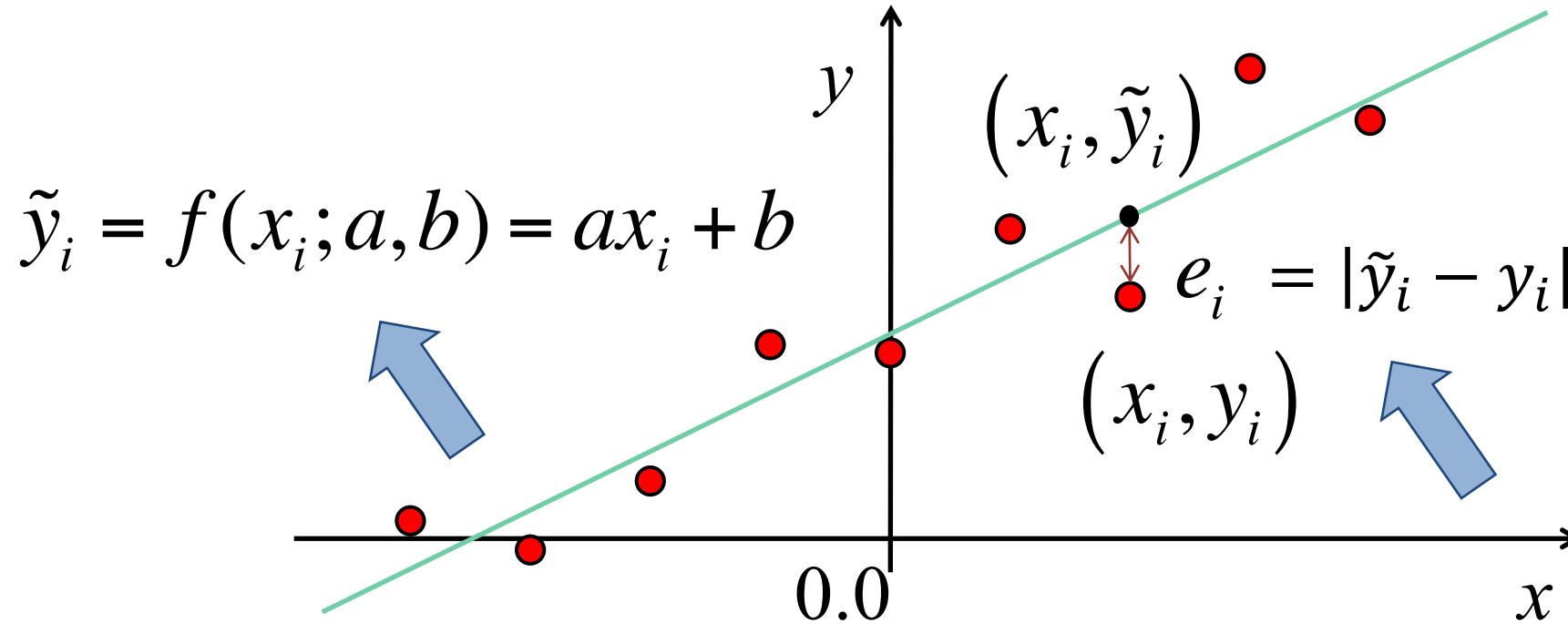
教師つき学習

モデルのパラメタ Θ を, 学習データ(training data)を用いて推定
⇒ 教師あり学習



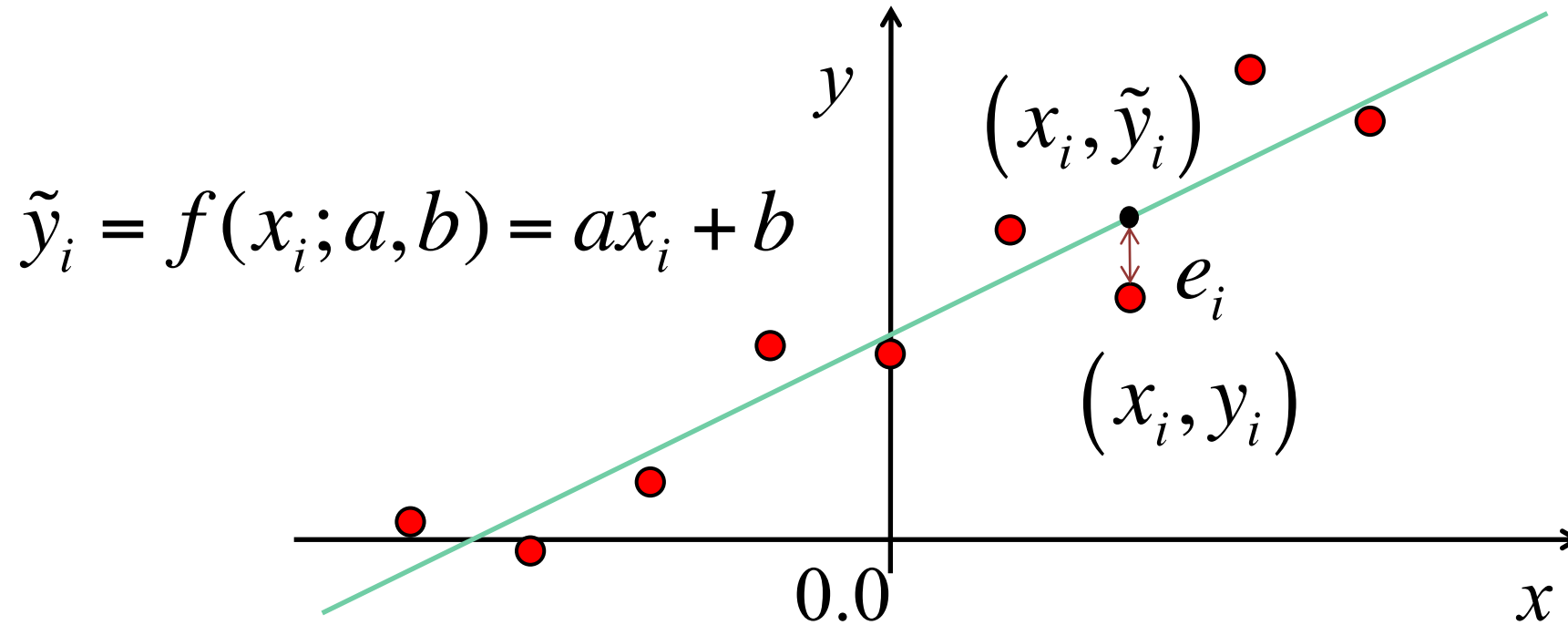
線形回帰

□ 与えられたデータに対し，線形関数を当てはめる問題



線形回帰

□ 与えられたデータに対し，線形関数を当てはめる問題



二乗誤差の最小化:

$$\min_{a,b} \sum_{i=1}^N e_i^2 = \min_{a,b} \sum_{i=1}^N (\tilde{y}_i - y_i)^2$$

最小二乗法

n 番目の学習データを (x_n, y_n) とする。

x_n に要素 1 を付け加えてベクトル化したものを \mathbf{x}_n とし、
回帰直線の係数ベクトルを \mathbf{w} とする。

$$\mathbf{x}_n = \begin{pmatrix} x_n \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{w} = \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$$

寄り道：ベクトルの1次元拡張

N 次元ベクトル $\mathbf{x} = (x_1 \ x_2 \ \cdots \ x_N)^T$ を扱うとき、定数項が生じる場合がある。

例えば、超平面の方程式は、その法線ベクトル $\mathbf{w} = (w_1 \ w_2 \ \cdots \ w_N)^T, \|\mathbf{w}\| = 1$, 原点との距離 c によって、

$$\mathbf{w}^T \mathbf{x} = c$$

と表される。

すなわち、平面の方程式は、 \mathbf{w} , c という2種類のパラメタを必要とする。

このため、パラメタを推定する場合などは、この \mathbf{w} , c のそれぞれについて異なる扱いが必要となる。

寄り道：ベクトルの1次元拡張

しかし、ここで、

$$\mathbf{x} = (x_1 \ x_2 \ \cdots \ x_N \ x_{N+1})^T, \ x_{N+1} = 1$$

$$\mathbf{w} = (w_1 \ w_2 \ \cdots \ w_N \ w_{N+1})^T, \ w_{N+1} = -c$$

とおくと、方程式は、

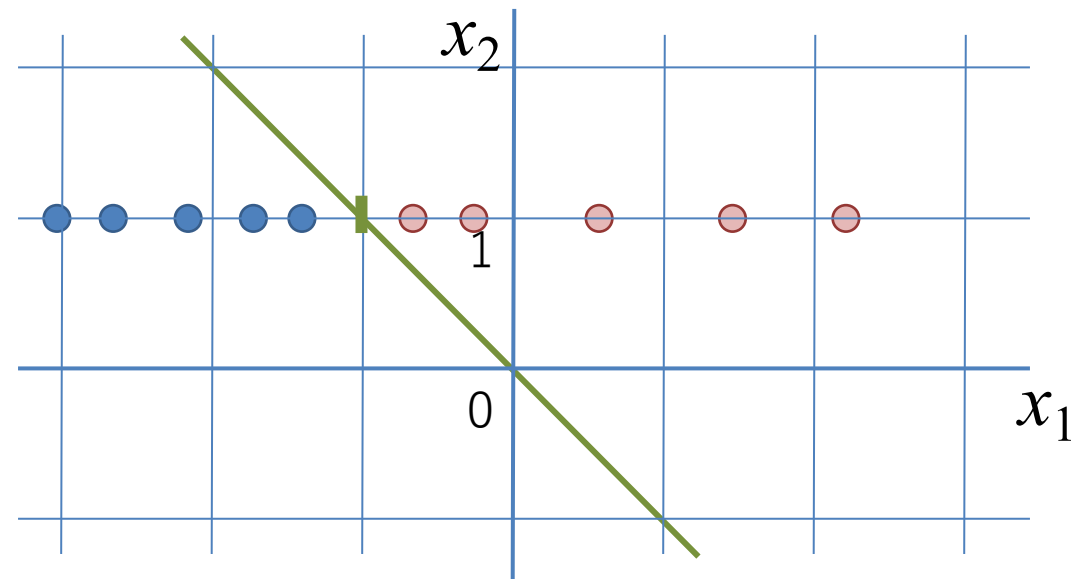
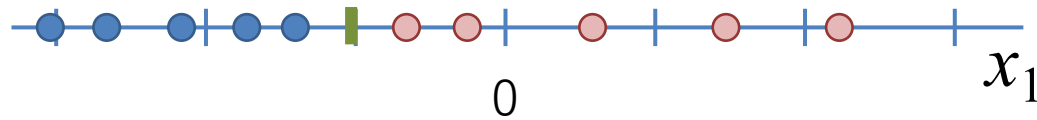
$$\mathbf{w}^T \mathbf{x} = 0$$

となって、形式上 c を除くことができる。

この「定数項が現れない」という性質は、アルゴリズム記述上便利なので、ベクトルに 常に 1 となる要素を付加する操作を行うことが多い。

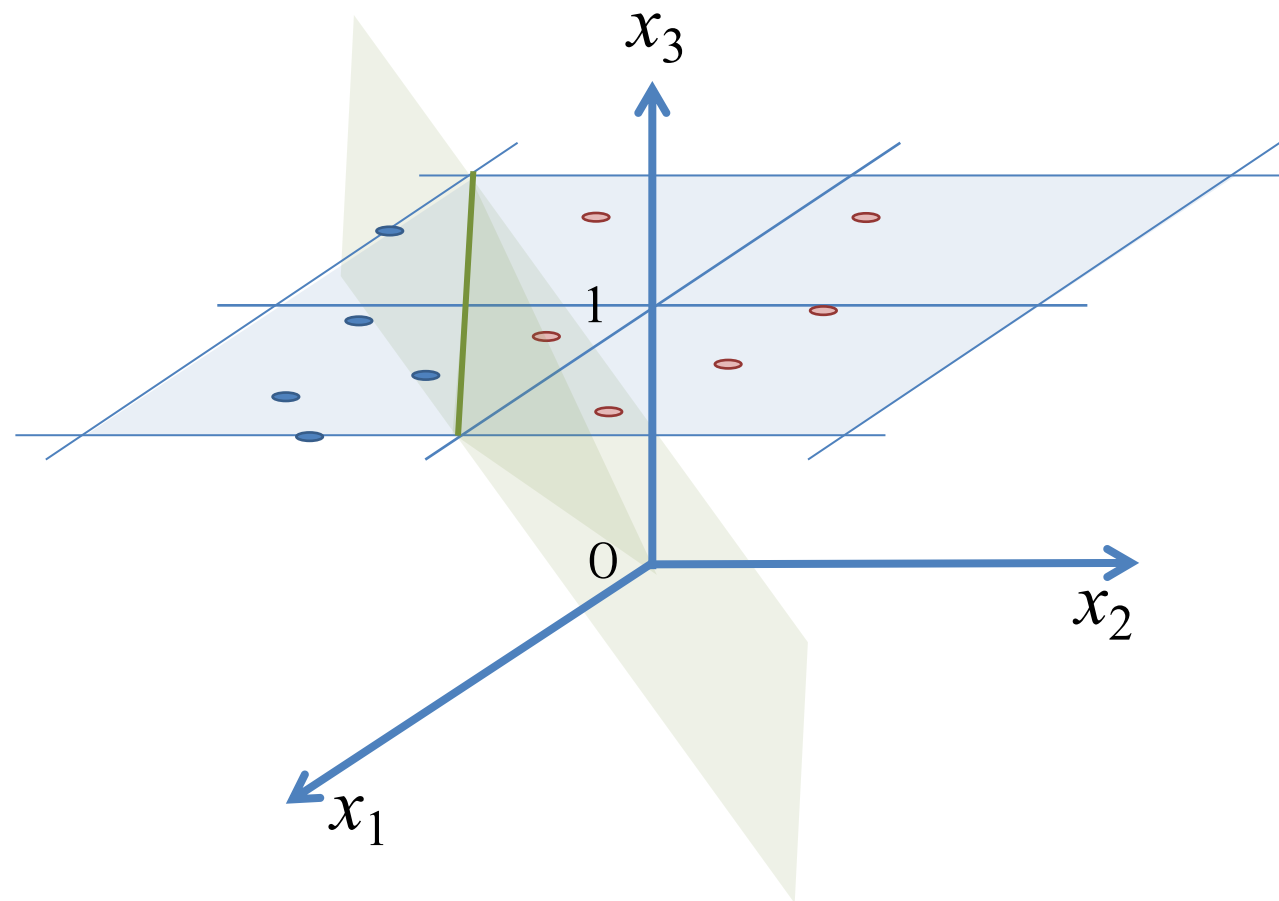
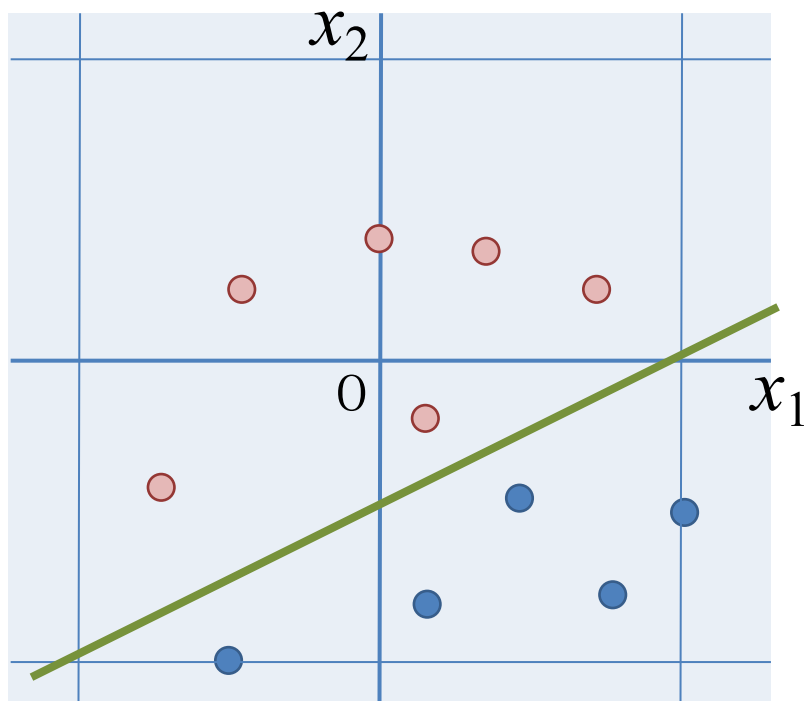
寄り道：ベクトルの1次元拡張

1次元データの2次元拡張の例



寄り道：ベクトルの1次元拡張

2次元データの3次元拡張の例



最小二乗法

再掲

n 番目の学習データを (x_n, y_n) とする。

x_n に要素 1 を付け加えてベクトル化したものを \mathbf{x}_n とし、
回帰直線の係数ベクトルを \mathbf{w} とする。

$$\mathbf{x}_n = \begin{pmatrix} x_n \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{w} = \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$$

最小二乗法

n 番目の学習データを (x_n, y_n) とする。

x_n に要素 1 を付け加えてベクトル化したものを \mathbf{x}_n とし、
回帰直線の係数ベクトルを \mathbf{w} とする。

$$\mathbf{x}_n = \begin{pmatrix} x_n \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{w} = \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$$

このとき、 n 番目の予測値を \tilde{y}_n とすると、

$$\tilde{y}_n = ax_n + b = \mathbf{x}_n^T \mathbf{w}$$

と書ける。


n 番目の行ベクトルとして \mathbf{x}_n^T を持つ行列を D とする。

$$D = \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1^T \\ \vdots \\ \mathbf{x}_n^T \\ \vdots \\ \mathbf{x}_N^T \end{pmatrix}$$



このとき、推定値のベクトルは、

$$\tilde{\mathbf{y}} = \begin{pmatrix} \tilde{y}_1 \\ \vdots \\ \tilde{y}_n \\ \vdots \\ \tilde{y}_N \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1^T \\ \vdots \\ \mathbf{x}_n^T \\ \vdots \\ \mathbf{x}_N^T \end{pmatrix} \mathbf{w} = D\mathbf{w}$$

誤差ベクトルは,

$$\mathbf{e} = \begin{pmatrix} e_1 \\ \vdots \\ e_n \\ \vdots \\ e_N \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \tilde{y}_1 - y_1 \\ \vdots \\ \tilde{y}_n - y_n \\ \vdots \\ \tilde{y}_N - y_N \end{pmatrix} = \tilde{\mathbf{y}} - \mathbf{y} = D\mathbf{w} - \mathbf{y}$$


このとき, 二乗誤差 E は,

$$\begin{aligned} E &= \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N e_n^2 = \frac{1}{2} \mathbf{e}^T \mathbf{e} = \frac{1}{2} (D\mathbf{w} - \mathbf{y})^T (D\mathbf{w} - \mathbf{y}) \\ &= \frac{1}{2} (\mathbf{w}^T D^T D \mathbf{w} - \mathbf{y}^T D \mathbf{w} - \mathbf{w}^T D^T \mathbf{y} + \mathbf{y}^T \mathbf{y}) \end{aligned}$$


$$E = \frac{1}{2} (\mathbf{w}^T D^T D \mathbf{w} - \mathbf{y}^T D \mathbf{w} - \mathbf{w}^T D^T \mathbf{y} + \mathbf{y}^T \mathbf{y})$$

これを最小化する \mathbf{w} を求めるために、傾きを求める。

$$\begin{aligned} \frac{\partial E}{\partial \mathbf{w}} &= \frac{1}{2} (D^T D \mathbf{w} + (\mathbf{w}^T D^T D)^T - (\mathbf{y}^T D)^T - D^T \mathbf{y}) \\ &= D^T D \mathbf{w} - D^T \mathbf{y} \end{aligned}$$

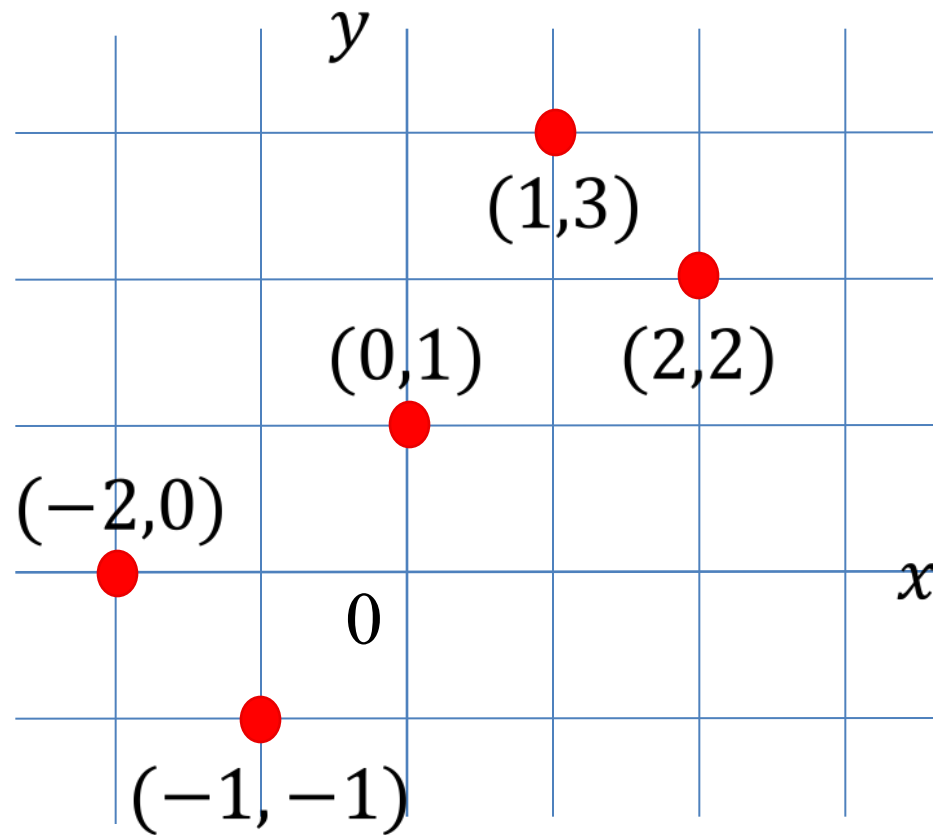
これを0とおいて、 \mathbf{w} について解くことで、

$$\mathbf{w} = (D^T D)^{-1} D^T \mathbf{y}$$

と求まる

例題

次の5点から，線形回帰モデルを，最小二乗基準で求めよ。

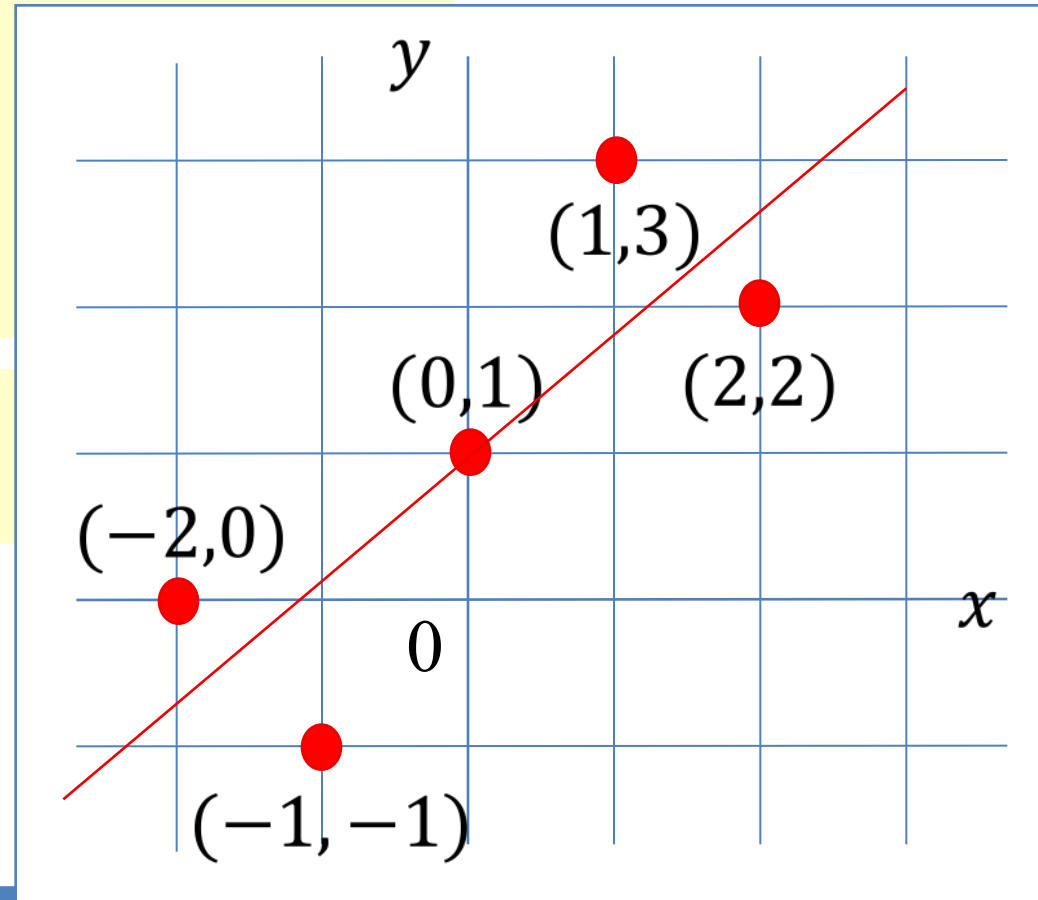


```
import numpy as np
from scipy import linalg as la
```

```
D = np.matrix([[-2,1],[-1,1],[0,1],[1,1],[2,1]])
y = np.matrix([0,-1,1,3,2])
y = y.T
A = D.T * D
w = la.inv(A) * D.T * y
```

```
print w
```

```
[[0.8]
 [1.0]]
```



説明変数が多変数の場合

$(x_{n1}, x_{n2}, \dots, x_{np}, y_n)$: n 番目の学習データ

$$\mathbf{x}_n = [x_{n1}, x_{n2}, \dots, x_{np}, 1]^T$$

$D = [\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_i, \dots, \mathbf{x}_N]^T$: データ行列

$\mathbf{w} = [a_1, a_2, \dots, a_p, b]^T$: パラメタ

$\tilde{\mathbf{y}} = D\mathbf{w}$: 予測式

$$\mathbf{w} = (D^T D)^{-1} D^T \mathbf{y}$$

まとめ

- 入力 x から出力 y を予測する問題において,
 y が連続値の場合を 回帰 とよび,
 y が離散値のとき 分類／識別 と呼ぶ。
- y を x の線形関数で表す問題を線形回帰と呼ぶ。
- 二乗誤差の最小化を基準として予測関数（回帰関数／識別関数）を求める方法を最小二乗法と呼ぶ。
- 線形回帰の問題を最小二乗法で解くとき, 解は解析的に求まる。

演習問題

1. 次の12点から，線形回帰モデルを，最小二乗基準で求めよ。

$(0,0,1), (0,1,3), (0,2,2), (0,3,3)$

$(1,0,1), (1,1,4), (1,2,5), (1,3,4)$

$(2,0,4), (2,1,5), (2,2,4), (2,3,7)$

